

第2回

講演者：斎藤 真理子氏（翻訳者）

講演題目：韓国文学に見る都市再開発と不動産階級社会

日時：2023年11月16日（木） 午後6時30分～8時

【講師プロフィール】



翻訳者。

1980年から大学のサークルなどで朝鮮語を学ぶ。1991年から延世大学語学堂で学ぶ。

主な訳書にチョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボール』、ハン・ガン『すべての、白いものたちの』、チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』、ファン・ジョンウン『ディディの傘』、パク・ソルメ『未来散歩練習』など。2015年、パク・ミンギョ『カステラ』で第一回日本翻訳大賞受賞。著書に『韓国文学の中心にあるもの』、『本の葉にぶら下がる』。

司会（六反田豊氏）：それでは、所定の時刻になりましたので、只今から2023年度第2回の東京大学コリア・コロキウム講座を始めたいと思います。

私は、司会を務めます東京大学韓国朝鮮文化研究室の六反田と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、お手元の資料にございますように、斎藤真理子先生をお招きしてご講演をいただくことになっております。斎藤先生につきましては、お手元のプロフィールに書いておりますが、私があえてここで細かく紹介するまでもなく、韓国で出ている韓国小説の翻訳家として、非常にたくさんの作品を日本の読者にご紹介いただき、翻訳のお仕事を長年なさっていらっしゃる方です。近年話題になった小説ですと、『82年生まれ キム・ジョン』なども斎藤先生がご翻訳されました。最近では、韓国の文化というとKPOPなどのサブカルチャーが目立ちますが、実は、大変たくさんの小説がこうして日本語に翻訳されて読まれるようになってきています。日本

で韓国の小説がたくさん読まれるようになってきた理由の一つも、斎藤先生にご尽力いただいた皆さんの小説を日本語に翻訳していただいたことがあるのではないかと思います。2015年には、パク・ミンギョという作家の『カステラ』という小説で第1回日本翻訳大賞も受賞なさっています。本日は、韓国のたくさんの文学作品・文学小説を先生ご自身もお読みになっていると思いますが、最近の現代の文学作品・小説を通じて、そこに見える韓国の現代社会の問題というもの、特に「都市再開発」「不動産階級社会」という観点から、お話をいただくことになっております。文学作品に関心を持たれている方もそうだと思いますが、韓国の現代社会について関心がおありの方にとっても、大変興味深いお話をさせていただけるのではないかと考えております。

それでは、早速講演の方に入りしたいと思います。斎藤先生よろしくお願いいたします。

【斎藤真理子氏講演】

斎藤真理子氏：今日はお集まりいただきまし

てありがとうございます。翻訳をやっており
ます、斎藤と申します。

今日は、「韓国文学に見る都市再開発と不動
産階級社会」というテーマにさせていただきました。
端的に言いますと、「家と韓国文学」
という話をしようかと思えます。現代の韓国
の小説を読んでおられますと、家に関する話題
が大変多いんです。そこには単に住まいに関
する問題を越えた何か大きいものがあると思
って、ずっと気になっておりました。今回、
これを機に、その問題についてお話をさせて
いただこうと思えます。

最初にお断りしておきますと、今日ここで
お話しする中では、「アパート」という単語を
たくさん使うと思うのですが、これは、
翻訳をするときには大体「マンション」とい
うふうに訳しております。仕方がないので「マ
ンション」としてはいますが、日本のマンシ
ョンと同じイメージで捉えると大違いです。今
日は「アパート」という単語で通しますが、
それはあくまで韓国式のアパートだとご理解
していただければと思います。

「アパート共和国・韓国」というようなこと
が言われてずいぶん長くなります。この右の
写真は分かりづらいかと思いますが、私が飛
行機の中から撮った写真です。飛行機で韓国
の上空を通りながら見ますと、こういう眺め
が非常によく見えます。白い建物が大規模に
並んで、何かこう、神様が韓国の国土の上に
白いレゴブロックをいっぱい並べて非常に楽
しく遊んだ後みたいですね。ソウル、釜山と
いった大都市だけではなく、中程度の都市、
もっと小さな都市にも、こういった白い綺麗
な高層マンションが規則的に同じ方向を向い
て並んでいるのをしばしば目にします。

それに比べると、日本の上空を通るとなん
てごちゃごちゃしているんだろうと思うん
です。目で見てまずもう国土が違う、人々
の住まい方が違う、そう思います。
日本でいう「マンション」を韓国で「アパー
ト」と呼ぶわけですが、概念が違うと思いま
す。韓国のマンションはまず、すごく高層で
すね。日本は地震国で耐震性の関係があるの

で、こうはできないわけですが、韓国では少
ない面積を高層にして高度活用しているため、
それぞれの部屋も広いですよ。そして韓国
のアパート団地には実に色々なものが完備さ
れています。大きなマンションが7棟8棟集
まって、その真ん中にお庭があってスーパー
もあって、学童もあってジムもあって、小さ
なライブラリもあって、そういう施設をどの
程度揃えるかということも法律で決まってい
るそうです。ですので、巨大なアパート団地
はそれだけで一つの街のような感じになりま
す。これについては、どのようなアパートを
建設するかでその地域の土地の値段も決まり
ますし、住民の選好度も決まるので、選挙の
時の大きな公約にもなったりもするわけです。
それを考えると、やっぱり日本のマンション
と韓国のアパートは全然違うと思うんです。

現在、住宅総数の63.5%がアパート、集合
住宅だという数字を見ました。統計庁の数字
だそうです。日本では12.75%ということな
ので、随分違いますね。これは全国平均で、
東京だと20%以上になります。なので、都市
と地方では違うでしょう。

そして、韓国もいきなりこうなったという
わけではなく、高層アパートが根付いてきた
のは70年代の後半からだと思います。人気
が飛躍的に伸びたのはやはり88年のオリン
ピックの後、90年代入ってからが特にそうだ
と思います。住宅としてアパートを選びたい
という人が戸建てを上回ったのは93年だ
という数字を見たことがあります。その頃に大
きな転換があったわけでしょう。

これは本当に大きな変化だったと思うん
です。今、ソウルでは、何もかもが江南から始
まるわけなのですが、この江南という土地は
本当に何も無い、農地にもなっていない野原
のようなところでした。ここに掲げましたの
は有名な写真で、高層団地を建設している下
で、牛を使って畑を耕しているわけですね。
本当にこうだったそうです。それが堂々たる
「アパート共和国」になるまで、そんなに長
い時間はかかっておりません。この変化はや
はり韓国人全体が経験した、とてもダイナミ

ックな大きな変化だったと思います。単に住まい方が変わったというよりも、韓国人の生き方が変わり、人生に対する考え方や姿勢や、そういった大きなものまで変わったのではないかと、そこまで大げさなことをいってもいいのではないかと思う理由は、この「アパート」という存在が、単に住みかかというよりは、常に投資の対象、投機の対象、お金を作るための目的として機能したという、それを国民の多くの人が共有して、その価値観をみんなで維持してきたからです。そして、韓国の作家たちはそういうことについてずっと書いてきました。ですから小説にも色々な形で、家の問題、不動産の問題、特にこれからお話する「撤去民」の問題というものが重要テーマとして存在します。

特に現在では、若者の住居に対する不安、住まいを手に入れることの困難が大きくクローズアップされています。これは、貧困の質が変わったこととも相まってとても深刻だと思いますし、その点は日本も同じだと思います。でもやっぱり出方が違うんですね、歴史が違うので。そのことを今、若い世代の作家たちが一生懸命書いているという現実があります。それらを今日はざっとまとめてお話したいと思いますが、私も、小説を読むとはいっても全部をしらみつぶしに読めるわけではなく、自分の目に留まったもの、それから面白いと思ったものを中心にします。「これが抜けている」「あれがない」というようなことはいっぱいあると思いますが、もし今日お見えになっている方で、「こういうのもあるよ」というのがありましたら、ぜひ教えていただければと思います。

それではまず、キーワードを三つ並べます。

「再開発」「チョンセ」「撤去民」です。

●「再開発」……老朽、不良住宅を壊してアパートを建てる事業。大規模な再開発で地価が上がるので、国民全員が常に再開発を注目している

●「チョンセ」……家を借りる際に高額の先渡し金（チョンセ金）を払うことで月々の家賃が免除され、かつ退去時にはチョンセ金の

全額が返済される韓国独特の慣習。これを活用して「持てる者」がさらに所有不動産を増やす

●「撤去民」……再開発に際して家を壊された人々で、70～80年代の韓国文学の重要なテーマ。

「再開発」と「チョンセ」。これは、韓国文学を翻訳している我々にとって本当に鬼門となる言葉で、これをどのくらい解説するかで小説の人物の理解度がかなり変わります。再開発という言葉の意味自体は日本で使うのと変わりませんが、老朽化した建築物を壊してアパートを建て、街を再構成する、韓国でもひとことで言うところなと思います。現在では老朽や不良でなく、結構まだ使える街でも大規模に再開発が行われることも起きています。国民が、自分の住む街はいつ再開発を迎えるのか常に注目しているというのが、日常的に見られる光景です。

それからもう一つ「チョンセ」ですね。韓国にお住みになった方々はご存じだと思いますけれども、お家を借りる時に高額の先渡し金、デポジットみたいなもの、かなり高額です。それを渡してそこに住ませてもらう。基本的に2年で契約が更新になると思いますが、契約を更新せず出て行く場合、預けたお金は全額返してもらえます。この制度も非常に昔からあります。何故このようなことが可能かということ、大きなチョンセ金という先渡し金を受け取った大家さんが、それを運用して利益を出すので、お互いにウィンウィンだということになっております。元々は、朝鮮戦争の後の相互扶助システムの一つとして生まれてきたんじゃないかということが言われております。また、農村が疲弊したために地方からソウルに集まって来た人たちが、いきなり家は買えないので、途中の段階を「チョンセ」で相互扶助したということも言われております。

とにかく、日本にはない制度で、世界でも珍しい制度でしょう。とても合理的で人助けにもなっていると思います。ただ、大きな額のお金が動くという面で、色々な副作用的な

問題が起きるわけですね。そして、この「再開発」と「チョンセ」がセットになることによって、不動産投資に一般の人も参加していくというコースがつけられます。一攫千金が本当に現実になった時代もあるわけです。それで、現在は一攫千金の夢というのは階層で上の方に溜まって、その分が下につけになって回っているというような現状になっていると思うんですけども、それを韓洪九（ハン・ホング）という歴史の先生が「全国民が投機を夢見るディストピア」「大韓民国はいつも工事中」などと表現されています。チョンセというのは賃貸と分譲の中間といってもいいのかもしれませんが、それだけでは説明できないところもあるでしょう。

再開発は、ソウルに限らずどこへ行っても必ずどこかでやっており、この写真のように高級マンションと貧しい人たちが住む地域が一つの画面に収まるということもしばしば人々が目にしている現実です。

そして、現在は「不動産階級社会」といわれる用語が韓国社会を説明する時に使われています。上から下まで見て、一番上が非常に高いアパート、本当に成功を極めた人しか住めないようなところ。それからアパート、その下が連立住宅・ヴィラというもので、4階建て以下の建物ですね。日本で中層マンションと言っているようなところも、韓国ではアパートには入らずに連立住宅・ヴィラとか多世帯住宅に入るかと思います。その下がワンルーム。一番下の「孝試院」というのはよくドラマなんかに出てきますよね。非常に小さな部屋で、これは住まいではなく宿泊施設に分けられるということです。元々は、公務員試験を受ける人が、家に勉強部屋がない場合はそこを借りて、そこにこもって勉強するという、非常に小さい空間ですが、ここを住宅として活用する方が大勢おられる。さらに「チョッパン」というのは、これも翻訳できない言葉ですが、一つのお部屋を4個とか8個に仕切って貸しているケースです。チョッパンというのは「部屋の欠片」というような意味です。仕切って貸すのは違法なんですよね。

違法なんですけど、それがたくさん存在するのが現実ということだそうですね。

このような不動産階級社会にいますと、不動産について考えることは大人のベースというか、大人の階段を登る時に避けられないテーマなので、自分一人だけそこから抜けますといっても、抜けられないわけですよ。

そういう中で、文学にも再開発とチョンセが頻出するわけでございます。一例を挙げますと、先ほど先生が紹介してくださった小説『82年生まれ、キム・ジョン』も、のっけから不動産の話から始まっています。これは、「キム・ジョン」という普通の女性が、どのように男女差別を経験して来たかという半生を振り返る話ですが、小説の冒頭で「キム・ジョンさんは何歳で、こういう夫がいて……」と説明した後ですぐ、「高層団地の24坪のアパートにチョンセで住んでいる」という説明文が出てきます。つまり、アパートの坪数と、持ち家ではなくてチョンセだということを示す、そこが大事なんです。これが個人のスペックを示すために重要だから、さまざまな事項の中でも割と早いうちに出てきます。

またキム・ジョンの話は、キム・ジョンのお母さんがなかなか個性的で面白かったんです。キム・ジョンのお母さんは、独学で高校を出た苦勞人なんですけれども、大変才覚があって、2度にわたって不動産で大きく成功しています。そのことについて、連れ合いであるキム・ジョンのお父さんが「古い知り合いの集まる所に行ったら、俺のうちの一番高級マンションで坪数が広がった」と自慢するんですよ。そして「これも半分はお母さんのお陰だな」とお世辞を言ったつもりになって言うんですが、お母さんが「半分じゃないでしょ。7:3で私でしょ」とやりこめるシーンがあります。『キム・ジョン』という小説ひとつをとっても、このように、不動産の話が韓国社会でのこの一家の位置づけや、人物のキャラクターを説明する上で重要な役割を持っています。

今、キム・ジョンの例を挙げたのは、大変分かりやすいからですが、そこに至るまで韓

国では本当に多くの作家が再開発の問題や家の問題を書いてきました。

それを大きく分けると、以下のようになるかと思います。

①70～80年代 告発の時代

チョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボール』他

②90年代～2000年代 内省の時代～不動産階級社会へ

イ・チャンドン「鹿川は糞にまみれて」他

③2009年～ 「龍山惨事」と警鐘の時代

ファン・ジョンウン『野蛮なアリスさん』他

④2010年代中盤以降～ 生存権としての住居問題を考える時代

キム・ヘジン『中央駅』『祝福を祈る心』他

では、順を追ってざっとご説明します。

まず、「①70年代～80年代」は「撤去民」という言葉がキーワードになります。「撤去民」という言葉は日本にはない言葉だと思います。これは何かというと、地域を大きく開発する時に、家を取り壊されて、住むところが無くなってしまった人々を「撤去民」と呼ぶわけですね。こういう言葉があるということは、いかにそういう人たちが層を成して大勢いたかということの意味します。全国撤去民連合といった団体もあります。撤去民は目に見える階級でありますから、作家たちがそういった人たちのために何か書かずにはいられないという気持ちを持つことになります。いくつか写真をお見せしますが、左は80年代の撤去問題が浮上した時の上溪洞（サンゲドン）というところの写真です。右はそれよりもずっと後の時代で、ミアリの辺りで再開発が問題になった時のもの、「撤去民がここに残っているぞ」というスローガンが書いてあります。

それでは、ここに至るまでの長い歴史の中で、ソウルや釜山の都市貧民といわれる人々の住まいがどうであったかということ、簡単に振り返ります。

まず、土幕民。植民地時代に日本が入って

来て社会が大きく変わり、農地を失った人々が都市に流入して来た時に、こういうむしろがけのような家を作って住んだ人たちのことを土幕民といったようです。

その後朝鮮半島が解放を迎えると、日本、満州、その他の地に散っていた人々がいっせいに戻ってきて都市に集まります。そして住むところがない人たちが、にわか作りでバラックを作って住んだところがソウルの龍山（ヨンサン）とか色々なところがありました。それらを「解放村」（ヘバンチョン）と呼んだそうです。その後すぐに南北分断に入ってしまう、北から逃げて来た故郷を失った人々「失郷民」（シリャンミン）の人たちも解放村に住む、またそういう街をどんどん作る。その後、朝鮮戦争に入ってしまう、戦争の時にも人口移動が起こりますし、戦争で住居もいっぱい焼けてしまい、難民も出るということで、ソウルも釜山もすさまじい住宅不足になります。その結果、1950年代後半にはソウルの人口の3分の2が移入人口になったそうです。大変な人口移動があったわけですね。1960年代になっても密集ぶりは変わりませんでした。

60年代、70年代と時代が進むにつれ、農村から都市への人口移入が進みます。これはソウルの清溪川（チョンゲチョン）、今はあんなにきれいになっているところですが、これは野村さんというソウルで宣教活動を行っていた牧師の方が撮られたものですが、70年代の清溪川はこんな感じなんですよね。非常に多くの人たちが集まって暮らしていたそうです。

次に1978年のタルトンネ（月の町）、この言葉をご存じの方もいらっしゃると思いますが、ソウルの貧しい人たちの密集地域は斜面をいっぱいに使います。ソウルは山に囲まれていて、斜面が多いですから。そのようにして斜面の上の方まで家を建てるので、てっぺんの人たちはお月様に近いねということで、「タルトンネ」というのは「月の町」という意味です。「サントンネ＝山の町」とも言いました。非常に抒情的な名前ですが、現

実はそんなものではなかったと思います。この写真は、斜面の上の方から撮った写真で、日本のある雑誌に 78 年に出たものでございます。タルトンネの現状というものがよく分かる感じかと思えます。

こういった地域を政府は半ば放置するような形でしたが、なぜなら、住宅供給ができなかったからですよね。ですが、70 年代に入って徐々に。あまりにも危ない箇所を取り壊して人々を移住させることをします。こうした密集地帯は、違法建築というか法律に則って建てられてはいませんから、火事の問題、水の問題、それから衛生状態の問題など、色々な問題がありますので、そこを大きく取り壊すことに政府は着手しますが、その際に代替住宅のことはあまり考えなかったんです。そこで、こういう地域に住んでいる人たちを本当にごみのように車に乗せて郊外に連れ去るということが、頻々と起きました。「ごみのように」という言葉が定型の表現として使われていますので、本当にそういう実感があったんだと思います。ソウルで色々な仕事をしてきた人たちが郊外につれていって、仕事ができないような状況にするので、それに対抗して暴動が起きたりしました。

1971 年にはその代表である広州大団地事件という事件が起きました。自然発生的に、約 3 万人と大変多くの人が参加してデモが起きたそうです。

この広州大団地事件デモを下敷きにしたといわれる小説がございます。1997 年に出た、尹興吉 (ユン・フンギル) という作家の、『九足の靴で居残った男』という小説です。尹興吉は 70 年代から 90 年代にわたって日本でもかなりの冊数の小説が紹介された人で、70 年代の非常に重要な作家です。この作品は尹興吉の代表作ですし、すごく面白いです。『九足の靴で居残った男』とは何かというと、さっきの広州大団地事件の時に、皆と一緒に暴動に加わったのに何故か首謀者と目されて投獄されてしまった運の悪い男の人の話なんです。この人は撤去民ですが、すごく不思議なプライドを持っていて、靴だけはきれいに磨くと

というのがその人のプライドです。この靴だけきれいに磨くクォンさんという撤去民と、その人におうちをチョンセで貸した主人公との関係を描いています。

結局、その不思議な交流が色々ともつれた挙句、クォンさんは靴を九足置いたまま家を出て行ってしまいます。政府が人々を非常に暴力的に支配した時代なので、政府の権力によって撤去民はいつでも追い出されてしまいますが、この小説からは、大家さんも、チョンセで家を借りている人もあまり変わらないねという印象を、私は読んでいて受けました。

この、九足の靴を残して行った撤去民は非常に訳のわからない人物ですが、同時にすごく面白いなという印象を抱かせるものでした。

それから、70 年代の代表的な撤去民の文学、またそれにとどまらず、韓国文学史上で非常に有名な、『こびとが打ち上げた小さなボール』(斎藤真理子訳、河出文庫) という作品があります。著者は趙世熙 (チョ・セヒ) 先生です。1978 年に刊行されましたが、間もなく日本でも抄訳されまして、80 年代に神戸の市民グループ「むくげの会」というところの人たちが、先生とちゃんと連絡をとって訳されたのです。私も、原書でも読んでいましたが、81 年にこれを読んで非常に面白いと思いました。それを経て 2016 年に、河出書房新社から全訳を出させてもらったわけです。

この小説は韓国で 1978 年に出ましたが、2022 年 7 月時点で累計 320 刷、総部数 148 万部を突破しています。

これだけ刷りを重ね、ずっと読まれているのは、やはり撤去民という存在が形を変えて現在も存在しているということも一つの理由ではないかと思えます。告発の文学であると同時に、色々な文学的な優れた手法を使って、大変心に残る素晴らしい小説だと思っております。映画にもなっているんですよね。

この主人公の「こびと」という人は、身長が伸びない障害を負った心の優しい男性です。この人と妻と 3 人の子供がタルトンネに住んでおり、ここが撤去されることとなります。撤去されると、代わりにその場所に建つ高層

マンションに住んでもいいよという権利はもらえるんです。でも、権利をもらったからといって、そこに住めるわけではないんです。権利だけを手にしても、そこをたとえ月家賃で貸すにしてもこびと一家には絶対払えないのは目に見えているので、本当に絵に描いた餅なわけで、その地域一体の人たち全員の撤去民がそうなんです。なのでどうするかというと、ブローカーに入居金を売るんですが、それが本当に二束三文なんです。けれども、その二束三文のお金でもいいので受け取って、どこか別の地域に行かなければいけないという非常に過酷な事態です。

しかし、現在でもそれに似た状況というのはありうるので、そういうこともあってこの小説が読まれ続けているのではないかと思いますね。機会があればぜひこの『こびと』は読んでいただければと思います。

これが78年の小説ですけれども、80年代に入りますと、更に再開発が活発化していきます。86年にアジア大会、88年にオリンピックが開催されますが、このように、こう開発国が先進国を目指す際、世界的なスポーツ大会を招聘して世界の人にうちの国の発展ぶりを見てほしいということは非常によくあることで、1964年の東京オリンピックと同じですね。その際には街をきれいにしようとするので、貧民街は一掃されることとなります。その際に、木洞（モクトン）というところと上溪洞（サンゲドン）というところの撤去問題が浮上しました。他にもいろんなところであったんですが、この2か所が非常に有名なんです。先ほどの広州大団地事件は自然発生的でしたが、この時には住民たちが組織を作って政治的な目標も掲げ、長い闘争をしています。

そのことを、李浩哲（イ・ホチョル）という作家が書いています。私はこの先生がすごく好きなんですが、『追いやられる人々』という短編がそれです。有名な作品ではないと思いますが、撤去民の登場する小説としてすごく面白いものです。多分、実際に作家が撤去民の誰かと交流を持ち、それをもとに書かれ

たと思われませんが、ノンフィクション風の作品で、一種の記録文学といえるかもしれません。

ここには、玉突きのように、あるところに住んでいて撤去されたから次の土地に引っ越し、引っ越したらそこも撤去されて、回り回って自分のうちの近所に来た、一生懸命働いているんだけれどもお金がたまらないという、そういう一人の果物屋さんとの交流を描いているんです。そしてこの交流を通して得た李浩哲の結論は、この社会は「貧しい人々は貧しすぎ、豊かな人は豊かすぎる」ということでした。撤去民との交流を通してこのように端的な教訓を得たわけですね。と同時に、この小説で面白かったのは、撤去民の果物屋さんの主人について、李浩哲が「この果物屋さんの人格は自分が知っている昔の農民のスタイルで、本当に懐かしいんだ」ということを書いていらっしやるんですね。これはすごく面白いと思いました。

というのは、趙世熙の『こびと』も、尹興吉の小説『九足の靴で居残った男』も、70年代80年代の小説は撤去民の肖像が非常に生き生きしているんです。キャラクターが強い、個性があるんです。それが、今見ると小説の王道を行っているような感じがして非常に面白いです。李浩哲はこの小説の最後を、「今、現場は木洞にある」という文章で締めくくっています。李浩哲は実際に多くの文学者と一緒に集まりを作って民主化運動に参加された方で、投獄もされた経験があります。85年という、民主化実現の一步手前の時期に、今我々が一番考えなければいけない現場は木洞の撤去民たちのあそこだ、ということをおっしゃっているのはなかなか重要ではないでしょうか。

70年代から80年代まで、「①告発の時代」の撤去民・再開発文学をざっとまとめてみますと、このようになります。

- ・尹興吉「九足の靴で居残った男」（1977 姜舜訳、『長雨』東京新聞出版局所収）
- ・チョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボ

ール』(1978,斎藤真理子訳、河出文庫)
・黄哲暎『豚の夢』(1980 未訳)
・李東哲(李喆鎔)『暗闇の子供たち』(1980 未訳)、『コバントンネの人々』(1981 未訳)、
・李浩哲「追いやられる人々」(1985 未訳)
・朴婉緒「泡沫の家」(1976 未訳)「女人たち」(1977 未訳)「楽土の子供たち」(1978 未訳)など。

ここに挙げた作家たちの名前を見ますと、非常に堂々たる人々が並んでいるという印象がありますね。こうした人たちが皆撤去民の問題を扱ったということは、やはりそれが目に見える社会矛盾・階級矛盾であり、当時の知識人たちが、自分の義務としてこの人たちの側に立たねばという義務感を持ったことを示しているのではないかと思います。

また、このうち朴婉緒(パク・ワンソ)さんという方は女性作家の中でも一番有名な、長老のような作家でした。この方は、撤去民というよりは、不動産投機に明け暮れた人々のこととか、アパートという不思議な空間に住むことになった人々のことをずっと書いていて、70年代から2000年代まで、韓国人のアパート人生を書きつづけた人といっていでしょう。朴婉緒の小説を読んでも、個人のキャラクターが非常に生々しく、立体的に伝わってくる、それが70年代80年代の小説の特徴かと思えます。

そのようにして時代は変わり、87年に韓国は民主化を迎えます。そして90年代に入ってきますと、大きなタルトンネはかなり撤去されてしまい、逆にソウルではお金のない人が家を見つけるのに苦労するというような状況になってきたということがいわれております。このころには、撤去民そのものを扱う小説というよりは、アパート社会に入った韓国そのものを見直すような小説が出てきます。

「②内省の時代から不動産階級社会へ」(90年代~2000年代)ですね。このころの代表的な作品としては、

・イ・チャンドン「鹿川は糞にまみれて」(1992

『鹿川は糞にまみれて』中野宣子訳、アストラハウス)

・ハン・ガン「私の女の実」(1997 斎藤真理子訳、『ひきこもり図書館』毎日新聞出版所収)、「鉄路を流れる川」(1996 未訳)

・コン・ジョン「おばあちゃんは死なない」(2001 未訳)

・パク・ミンギョ「甲乙考試院滞在記」(2005 『カステラ』ヒョン・ジェフン&斎藤真理子訳、クレイン所収)

・キム・エラン「ノックしない家」(2005 『走れ、オヤジ殿』古川綾子訳、晶文社所収)。

私が大事だと思ったのは、いま映画監督として非常に有名なイ・チャンドンの『鹿川は糞にまみれて』(1992年)です。これは最近本が出まして、中野宣子先生が訳されています。この鹿川というのが、先ほども紹介した上溪洞なんです。この地域で、貧しい中から一生懸命苦勞して学校の先生になった人が苦勞してやっとアパートを手に入れるわけです。そこでは先ほども言ったようにマンションを建てるために人々を撤去した後、今もずっと工事が続いています。そして、工事現場にトイレが少ないらしいんですよ。なので、働く人たちがトイレに行かずその辺で大小便をしてしまうので、鹿川は糞まみれなんだそうです。ですけれども主人公は、それでもここにアパートを買って満足していました。

そこへ、腹違いの弟が転げ込んで来て、「この町内は、マンションを建てるために、もともと住んでいた人々を強制退去させて騒ぎになっていた所だろう？」などと言い、こんなところに住んで心が痛まないのか、というようなことを兄に対して匂わせます。主人公は腹を立てて、「だからといって、僕がここのマンションを嫌だとは言ってもらえないじゃないか」などと反論しますが、そうは言いつつも、この弟が入ってきたことによって、自分が苦勞して手に入れたアパートというものは何だったのだろうか、足元が崩れてしまうような意識を味わうのですね。読むと結構辛い気持ちにはなりますけれども、それがかえ

って生命力があるという韓国文学のよくあるパターンの短編ですね。

このイ・チャンドンさんたちの世代は民主化運動で非常に熾烈に闘った世代ですが、その方たちが、民主化が成し遂げられた後に感じた虚脱感であるとか、自分たちが苦勞して手に入れたものがこの程度なのかという自罰意識や虚無意識、それがアパートという存在に重なっているようにも思います。そういう民主化後の虚脱感を描いたものを、韓国文学の世界では「後日談文学」といいますけれども、この『鹿川』も、後日談文学に含めてもいいのかもしれませんが。これは、「撤去問題を告発する時代」から、「アパート社会を内省的に見つめる社会」に入ったということじゃないかなと思っています。

この頃から徐々に不動産階級社会といわれる階級の枠組みがきっちりできてくると思います。

次に挙げたハン・ガンという作家は、今非常に有名な、世界的に見た時に一番有名かもしれない、世界の色々な賞をもらっている作家です。この人が90年代の後半から小説を書き始めるんですけど、ハン・ガンさんはアパートという住空間そのものへの拒否感をかなり継続的に書いていますね。

『私の女の美』という不思議なタイトルの小説があるんですけども、これはまさにアパート小説です。この小説にはある夫婦が出てきます。夫はちょっと俗物っぽい感じで、妻の方は社会の暴力に対して非常に敏感な女性として描かれています。この夫が漏らす台詞の中に、「自分は今非常にハッピーだ」という内容があります。「これまでの三年は、私にとって最も温かく平和な時期だった。荷が重すぎも軽すぎもしない職場の仕事、幸いにも相場に無関心でチョンセ金を値上げしない大家、満期まじかの住宅積立貯蓄」と、…のつけから幸せの条件が不動産のことばかりなんですよね。妻のことは不動産の次、というのがすごいと思いますけれども。

この「チョンセ金を値上げしない大家」というのは、2年ごとにチョンセ金を値上げす

る大家がとて多いからなんです。値上げと言っても日本円で言うと500万円くらいとか、額が半端ではないので、後で戻って来るとは言っても出しにくいじゃないですか。でも、自分の大家はそういうことをしないのでありがたい、と、そういうことなんです。

一方で、妻の方は「人口七十万人が集まって住むなんて、そんなところへ行ったらゆくり枯れ死んでいくような気がする。何百、何千棟のそっくり同じ建物、一戸一戸にそっくり同じ厨房、そっくり同じ天井にそっくり同じ便器、浴槽、ベランダ、エレベーターもいや。公園も遊び場も、団地内の商店街も、横断歩道もいや」と思っています。

韓国のアパート団地は規模がものすごいすから、日本のマンションとは違いますから、あの森のようなアパートの中で、そこが嫌だと思った人にとっては非常に辛いだろうなと思います。ハン・ガンは、社会の目に見えない暴力といったことを大きなテーマに据えています。住環境の画一性とか、競争社会で人を蹴散らしてアパートを手に入れるという現在のシステムに危機感があるのではないかなと思います。

一方で、この時代に書かれた小説の中で非常に面白いなと思ったものは、ハン・ガンより一世代上の孔枝泳（コン・ジヨン）という有名な作家の、『おばあちゃんは死なない』という短編。これも翻訳されていませんが、70年代後半に不動産で儲けたおばあちゃんを孫娘が見て描いた小説で、ファンタジーなんです。孔枝泳さんは、ファンタジーをもっといっぱい書いた方がいいんじゃないかと思うほど面白かったんですね。

これは一人の、不動産で儲けに儲けたおばあさんが、病気で死ぬ場面から始まる小説です。ですけれども、お葬式をしている間におばあさんが何となく生き返ってるんですよ。そして何度でも生き返ってしまうという、南米文学のような不思議な感じなんですけど、このおばあちゃんが暴力性のかたまりなんです。それを孫娘が耐えられないと思って批判的に見えています。たとえばおばあちゃんは「持

たざるものが持てるものから奪おうとしている、それが世の中だ」という考え方の人なんですね。逆ではないんです。孫娘から見ると、おばあちゃんは自分を守るためには絶対に人を傷つけなきゃいけないと思ひ込んでおり、自分は、そんなことはないとおばあちゃんに知らせたいのだけれども、絶対に無理だと、身に染みて思ってもいます。おばあちゃんは余りにもバイタリティーがありすぎて、死んでも死んでも生き返って来るんですよ。で、おばあちゃんが生き返る度に親族が一人ずつ死ぬんです、おじさんとかおばさんとか。他人を蹴散らすようにして生きぬいてきた韓国の負の面みたいなものをぎゅっと凝縮して描いていて、本当に面白かったです。

このおばあちゃん自身が朝鮮戦争のときにもすごい目に遭って、よく生き延びたなどというようなバイタリティーのある人なんです。ですから、人間の二面性を巧みに書いていると思いました。これが、ファンタジーで描いた不動産物語です。孔枝泳さんは小学生だった70年代からアパートに住んでいたと聞いています。ですからアパート共和国初期の非常にバイタリティーのある、同時に暴力的だった時代を体で知っている世代です。もしかしたらそういうものを描ける最後の世代に属しておられるのかもしれませんが。

その後、不動産小説や撤去民小説については特徴的なものはあまり見られなかったと思いますが、大きなきっかけになったのが、2009年に起きた「龍山惨事」です。韓国ではセウォル号事件とか、2022年の梨泰院雑踏事故もそうですが、無念の死をとげた人たちがたくさん発生した事件・事故を「惨事」という名称で呼ぶことがあります。日本では「龍山事件」といいますね。これが、撤去民という言葉がもう一度大きくクローズアップされた事件でした。

ご存じの方も多いと思いますけれども、2009年にソウル中心部の龍山地区を大規模開発するとき、小規模なお店を借りていた経営者たちが、補償があまりにも具体的ではないし足りないので、立ち退きに応じず、あ

るビルに立てこもっていました。そこに特殊部隊が投入されるという事態になりまして、ビルの中に可燃性のものがあつたのでそれに引火して火事になり、住民と警官が亡くなるという大変な事件が起きたんです。

このとき、大勢の市民が現場に訪れましたが、その中に『こびとが打ち上げた小さなボール』の著者である趙世熙先生もおられました。献花台が現場に設置され、そこに白い菊の花を持って訪れた姿が報道されましたが、趙先生はこういったときに必ずいらっしゃったものだ、という話を聞いております。この事件は作家たちにも非常にショックを与えたと思われまます。

また、これは『ここに人がいる』というノンフィクションの本です。龍山惨事を受けて出版された撤去民のインタビュー集なんです。ここに人がいる、という言葉には既視感がありますね。人がいるのに何故こんな乱暴なことをするのかという非常にダイレクトな問いが示されています。このインタビュー集に収められたケースでは、撤去の規模や性格は『こびとが打ち上げた小さなボール』の時代とは違ってきているとは思いますが、システムの歪みの下にこういう人たちが常にいるという点では同じですね。

この龍山惨事を受けて、すごく多くの作品が書かれました。それが、「③2009年以降～龍山惨事と警鐘の時代」と名づけた時代です。代表的なものとしては、

- ・ファン・ジョンウン『百の影』(2010 オ・ヨンア訳、亜紀書房)、『野蛮なアリスさん』(2011 斎藤真理子訳、亜紀書房)
- ・キム・エラン「水中のゴリアテ」(2010『ひこうき雲』古川綾子訳、亜紀書房所収)
- ・キム・ヨンス「君たちが皆、三十になった時」(2009『世界の果て、彼女』呉永雅訳、クオン所収)
- ・ソン・アラム『少数意見』(2010 未訳)
- ・イ・ギホ「ナ・ジョンマン氏のちょっぴり下に曲がったブーム」(2014『誰にでも親切な教会のお兄さんカン・ミノ』斎藤真理子

訳、亜紀書房所収)

・黄皙暎『江南夢』(2010 未訳)『見慣れた世の中』(2011 未訳)

・チュ・ウォンギョ『望楼』(2011 未訳)

・チョン・チャン『鳥の視線』(2017 未訳)

・ハン・スヨン『プルトの屋根』(2010 未訳)

・ペ・ミョンフン『タワー』(2009 斎藤真理子訳、河出書房新社)

・ハン・ガン『少年が来る』(2014 井手俊作訳、クオン)でも言及。

今回、このように並べてみて、「こんなにあったっけ」と思ったのですが、こういう時、韓国の作家たちの動きは速いです。セウォル号事件の時もそうだったと思いますが、即応する形で作品が書かれます。日本で今翻訳されて人気を集めている作家たちのものも多いですね。たとえば、先ほども名前が出たハン・ガンが『少年が来る』という光州事件を扱った作品を書いています。この最後の方にも龍山惨事のことやら出てきて、作家自身その火の手を見た時、「あれは光州と同じものではないか」と思ったという、印象的な一行があったりします。ですから、韓国社会における大きな警鐘のイメージというか、撤去民をそのように見る空気が今でもあるのですね。

また、先ほど表紙をお見せした『ここに人がいる』という撤去民のインタビューの本には、『こびと』の作家の趙世熙先生が推薦文を寄せています。そこには、「30年前に自分があの小説を書いた時に、ここから始めなければならぬと思ったし、未来にこのようなことがないようにと強く思った」「このような不平等や、愚かな分配方式のもとに政治経済が進んで行けば、我々は崖から落ちるしかないと考えていた」「『こびと』は、崖っぷちに置かれた警告の立て札のようなものだった。『この線を越えたら危険だ』という立て札のようなものだった」という言葉を寄せていらっしゃいます。

龍山事件の後に書かれた作品群の中で一番

有名であり、また高い評価を受けたのは、ファン・ジョンウンという作家ではないかと思えます。私はこの作家が非常に好きなんです。『百の影』と『野蛮なアリスさん』、両方とも再開発と撤去をテーマにしていますが、直接龍山事件を扱っているわけではありませんが、けれども色濃く反映されています。ファン・ジョンウンは龍山事件のときに現場に行かずと一人で座り込みをやったり、裁判を継続的に傍聴していたそうで、大量の資料をお持ちだと思いますが、それを直接的に書くというよりは(この先いつか、おそらくお書きになるとは思うんですけども)、自分が知っている2つの場所について書いたわけですね。

『百の影』は、世運商店街(セウンサンガ)という電気関係のお店がものすごくいっぱい入ったとても大きなビルの再開発、ジェントリフィケーションを背景にした物語です。世運商店街には実際にファン・ジョンウンさんのお父さんがお店を出していたそうで、作家自身がよく知る場所だったのですね。そこを舞台にしたものが一つ。それから『野蛮なアリスさん』というのは、金浦空港に近い辺りの撤去の問題なんです。私が翻訳を担当しましたが、すごい小説でした。一種のファンタジーを交えながら、現在の撤去と再開発のグロテスクさを描いています。撤去民との関係を見ますと、『こびと』の時代の作家と比べると、ファン・ジョンウンの時代には書く人と書かれる人との距離がぐっと狭まっているような感じがいたします。時代が変わるに従って、作家の役割も少しずつ変わっているのではないのでしょうか。ファン・ジョンウンは、ある意味当事者意識を持って、これらの小説を書いたのではないかと思えます。

その時代を通過して現在に至りますが、現在は住まいの問題もどんどん変化して、先ほど言った孝試院とかチョッパンといった住まいで暮らさなければならぬ人たちが非常に増えてきています。その中で、文学の中でも、生存権としての家の存在を考えざるをえなくなっていると思います。韓国では従来、

家を投資の対象として見てきたけれども、そもそも家というものは権利なのか商品なのか、という非常に根本的な問題に立ち返って考えるような小説が現れています。

現在の若い人たちの小説には家が出てこない小説がないぐらい、本当に深刻な問題として、中心テーマにもなりますし背景にも出てきますね。「④2010年代中盤以降～ 生存権としての住居問題を考える時代」です。主な作品は、

・チョン・イヒョン「引き出しの中の家」(2016『優しい暴力の時代』斎藤真理子訳、河出書房新社)

・ペク・スリン「ひそやかな事件」(2016『夏のヴィラ』カン・バンファ訳、書肆侃侃房所収)

・チェ・ジョンファ「すべてを元の位置へ」(2017『ヒョンナムオッパへ』斎藤真理子訳、白水社所収)

・ファン・ジョンウン「誰が」(2013)「笑う男」(2014) (『誰でもない』斎藤真理子訳、晶文社所収) 「d」(2019『ディディの傘』斎藤真理子訳、亜紀書房所収)

・キム・ヘジン『中央駅』(2013 生田美保訳、彩流社)、『娘について』(2018 古川綾子訳、亜紀書房)、「真夜中の山道」(2013『オビー』カン・バンファ&ユン・ブンミ訳、書肆侃侃房所収)、「三区域、一区域」「八福広場」(2020『君という生活』古川綾子訳、筑摩書房所収)

一部を挙げましたが、このほかにも本当にいっぱいあるんです。

この中でも代表的だと思ったのは、チョン・イヒョンという方、この前日本に来られたんですが『優しい暴力の時代』という、たいへん意味深長なタイトルを持つ短編集の中に「引き出しの中の家」という短編があります。これは、アパートに暮らしながら「このシステムには問題があるけど、どうしたらいいのか」と思っている人たちの最大公約数的な気持ちを表しているように思いました。「引き出しの中の家」の主人公たちは、チョンセでア

パートを借りている、子どもがいる夫婦です。さっきハン・ガンのところでちょっと出てきたように、ある日突然大家さんが、チョンセ金を相場に合わせて上げますから来月の契約更新の時に5000万ウォン持ってきてね、と言うんです。この夫婦は、自分たちの大家さんは良い人だと思って油断していたので非常にびっくりして、色々考えた末、この機会に家を買っちゃおうということになるんです。で、不動産屋を回り始めるとすごくお得な物件があったので、そこに大急ぎで入居することに決めました。ところが、入居する新しい物件の中を見たいのに、不動産屋が色々なことを言ってなかなか内見をさせてくれません。どうやらそこには、前に住んでいた人にまつわる辛い事情がある。その人に出ていってもらって自分たちが入るとい、かなり後味の悪い事情があるのだが、それに目をつぶらなければ自分たちの夢はかなわない。これが「優しい暴力」なのですね。ブルドーザーを使って家を壊して撤去するわけではありませんが、資本の論理で優しく押し出して、その後で何事もなかったかのように入って行かなければならない。夫婦はここを逃したらまたチョンセに戻って、また2年ごとに500万円ぐらい払わなくてはなりません。そう思うと後に引けないですよ。そういった気持ちを主人公の女性が、「不動産とは、神か政府か、とにかく絶対権力が人間を手なずけるために考案した効果的な装置であることがはっきりわかった」と表現しています。このストーリーには、本当に多くの人が共感するのではないかと思います。それでもやっぱり引き返せないわけなんです……。非常に典型的なアパート小説というか、不動産階級社会小説だと思います。

また、現在の住宅問題を考える時に、イ・ヘミ著『搾取都市ソウル』(伊東順子訳、チョセヒ)という、新聞記者の方が自分でルポルタージュをして連載をした記事をまとめた本が非常に参考になりました。著者が言うには「チョンセシステムは単なる不動産ビジネスの慣例というより、支配構造だ」。読んでいく

と全くその通りだと思いました。ここで扱っているのが、先にも少し触れましたが「チョッパン」という部屋です。これは、不法に部屋を区切って人々に貸しているんですけども、この狭さでも最初に預けるデポジットが日本円でいうと400万円強といえます。水も出ない、オンドルはない、お風呂に入るには一番近い住民センターまで歩かなきゃいけないとか、そんな部屋なのに、多額のチョンセ金を入れないと貸してくれない、これは支配構造以外の何物でもないですね。

そして著者が調べた結果、こういう劣悪な賃宅を所有しているのが、ものすごい富裕層一族だったりするんですよ。一族3代でこの地域の物件をむちゃくちゃいっぱい持っていたそうです。彼らは絶対にこういった住宅の傍には来ません。代わりに、これらの住宅が密集する地域のどこかのお店の主人などをお願いして、管理人をやってもらっているんです。だから一生、持ち主と借り手の人生は交差しないんです。不動産階級社会の上と下の人は出会うことはなく、しかししっかり支配されているという、ちょっとすごい話でした。

こういったことを踏まえ、不動産階級社会についていま最も肉薄して小説を書いているのが、先ほども名前が出たファン・ジョンウンと、キム・ヘジンという作家ではないかと思っております。

ファン・ジョンウンについては、「家」そのものに迫る描写が非常に細やかな人で、以前から本を読むたびに、何でこの人の家の描写はこんなに生々しいのかなと思っておりました。韓国の人はしょっちゅう不動産の話をしているので、小説にも頻繁に不動産についての会話が出てきます。その会話が、ファン・ジョンウンの小説の中ではとてもビビッドなんです。「上京」という小説に、不動産にあまり関心のない人が、友達が不動産の話をするのでいい加減に相槌を打っていたところ、相手が「別世界から来たのかよお前は」と怒りだすというシーンがあったんですけど、そういった場面がファン・ジョンウンさんの手にかかるると非常に生々しいのです。そしてだん

だん、ファン・ジョンウンが「家」というものに対してきわめて鋭敏な感覚をもっているということが分かってきました。

『誰でもない』という短編集に入っている『笑う男』という短編があるんですが、これは、恋人を亡くした男性が、半地下の自分の部屋から出て行けず引きこもって暮らしているという設定で書かれています。この人が自分の部屋の壁紙を剥がしてみると、そこに現れた壁はものすごく脆くて、指が入っちゃうような代物だったというのです。しかも色んな色の染みがあって、それを見ると、この壁は、壁というような強固な存在というより、単に様々な廃材を集めて固めただけものじゃないか。主人公はその時に、次のように考えます。

「外に走って行って、誰でもいいから訊いてみたくなる。壁を見たことがあるか？と。つまり、壁をほんとうに見たことがあるかって……あなたの家にも壁はあるはずだ……あなたの家にも……あなたがいつも眺めている壁、信じきっているし別に信じてもないその壁……それがじつはこうだっていうことを？」。

この表現にグッときてしまいました。ここだけ取り出しても変な感じがすると思うんですけども、壁をぐっと見つめていく視線の強さにですね。壁というのは、服を脱いで裸で曝されたら死んでしまう人間と外界を隔てている、本当に大事なものです。それが、壁紙を剥いだらこうだったということ。こういう家を作って人に貸したり売ったりしている社会だということが、ここからありありと分かるように思いました。この作家は、このような家に対するきわめて鋭敏な感覚を基に、再開小説を書いています。

一方、キム・ヘジンという人も洪くて良い作家なんです。日本でも『中央駅』（生田美保訳、彩流社）、『娘について』（古川綾子訳、亜紀書房）、『オビー』（カン・バンファ&ユン・ブンミ訳、書肆侃侃房）、『君という生活』（古川綾子訳、筑摩書房）など色々翻訳されていますが、一番話題になったのが『娘について』ではないでしょうか。『娘について』というの

は、LGBT の娘を持つ母親の一人称で書かれておりで、韓国文学特有の「考えに考え、さらに考え抜く人物像」を徹底して書いたものです。非常に苦勞して娘を育ててきたお母さんのところに、娘さんがレズビアン of 恋人を連れて出戻ってくる。その後母親の苦惱が始まって、考え抜くという小説なんです。この話も実は、冒頭は家の話から始まります。娘さんが家に戻ってくる前の段階で、お母さんが自分の持ち家の二階にチョンセで人を入れているんですが、あの人たちに出てもらってその代わりに私たちを入れてくれないか、と相談することから始まるんですね。非常に生々しいです。

また、『中央駅』という小説はホームレスの小説で、ソウル駅を思わせる駅の前の広場に寝泊まりするホームレスたちが主人公ですが、衝撃的だったのは、ホームレスの人たちが撤去作業の作業員の仕事を請け負う話が出てくるんです。撤去の時って、立ち退きに応じない人たちを追い出すためのありとあらゆる凶悪な手が使われる場合があります。家に落書きをしたり、道に毒をまいておき、猫やカラスがその毒を食べて死んだら、その死骸を持ってきて立ち退かない人の家の窓に投げ入るとか、ありとあらゆる嫌がらせを組織的に請け負う会社があって、その会社がホームレスを雇うんです。何故かというと、住所もない、身分もない彼らがその仕事に最もうってつけだからです。こういう人たちが、何か事故があって消えても、だれも責任を問われないから。撤去に抵抗して頑張っている人たちから見れば、彼らは自分たちの家を襲いに来る凶悪な人々ですが、その人たちがホームレスなんだということを彼らは知らないという、すさまじい構造が書かれています。友達に聞いてみたら、そういうことは実際にあっておかしくないと言っていました。

こうした、住まいをめぐるとてもつもない人間と人間のすさまじい関係。キム・ヘジンはこのような人間関係の問題として家のことを描くという視点がはっきりしています。それとともにこの作家は、「現在の再開発はその必

要がないはずの地域で行われている」という考えを持っていると思います。『中央駅』の中には、ホームレスが見るソウルという街の印象として、「この都市の人々は、何かを壊して別のものにつくり変えることに慣れている、慣れ過ぎている」という言葉が出てきます。また、「新しいものができる、それ以外のものはたちまち古くなってしまふ」と。非常に実感のある言葉だと思います。

また、他の小説には「何の問題もない町に再開発だ、建て替えだと期待を伝染させ、この土地に十年以上も暮らす人たちの気を揉ませている」、つまりこんな大規模な開発をしなくても、リノベーションをしたり、いくらでも街を活かす方法はあるのではないかという考え方が現れています。ここには、韓国の再開発というものが、新自由主義的な利益主導の手法と結びついていることが大きく関係していると思います。

先ほどお話しした『こびと』の時代のスラム地域の再開発では、そこに住んでいた人たちが住めるだけの数の家を作るのではなく、それよりももっとたくさんの戸数の、そしてもっとレベルが上の住宅をいっぱい建てて、そこに中産階級以上の人たちを呼びこみお金を落としてもらう、そのお金で全体の住民の負担を減らすという、一種合理的な考え方だったと思います。そして現在、その方式を、非常に住環境の劣悪な地域とはいえない、多少古びてきた商店街や住宅地を再開発する時にも使うので、再開発が終わってみると結局、庶民のための庶民らしい住宅の集まる街に、よりお金のある人に来てもらって住んでもらう形になり、元々住んでいた人がそこに住み続けられないという事態が何度も起きています。それに対してキム・ヘジンは、「家というものはそんなふうにして動かしていいものではない」ということを言いたいのだと思いますね。

従来からキム・ヘジンは家のことをたくさん書く人だなあと思っていたところ、先々週検索しましたら、『祝福を祈る心』(축복을 비는 마음)という最新刊の短編集が出たばかり

りだったのですが、この本は8編全部が家の物語という、そういう本だったんです。一昨日教保文庫からうちに届いたばかりでまだ読んでいませんが、解説を読んだ限りでは「家をめぐる人間関係」にスポットを当てた小説集といえそうです。さまざまなレベルで不動産や家をめぐって人と人の心の繋がり、または断絶が起きるわけですし、また再開発というのは、街を分裂させてコミュニティーに亀裂を入れることですから、そこで特に子どもの心に大きな傷が残るケースがあるわけです。これはペク・スリンという作家が丁寧に書いていたりしますが、『祝福を祈る心』は、そういった、家や不動産をめぐると人の心の風景としての8編を集めています。「祝福を祈る心」というのはある大家さんと店子が交わした、希望のほの見える会話からとられているようで、突破口を考える短編集でもあるようです。

また、やはり新刊で『チョンセ人生』(전세인생)というアンソロジーが出ていたりします。韓国の文芸の世界ではさまざまなテーマ別のアンソロジーがどんどん出てたいへん面白いのですが、チョンセをタイトルにしたアンソロジーが出るというのは、人々がいかにかこのシステムについて考える必要を意識しているかということかもしれません。

さらに『82年生まれキム・ジョン』の作家チョ・ナムジュさんの新作も、これもまた再開発の話でした。今月は再開発と家の小説がガンガン来ているなと思ひまして、もしかしたら家や再開発をめぐる視線というものが、文芸界でも加速化しているのかなと思った次第でございます。ただ、動きが非常に速いので、今だけのことかもしれませんが、もしかしたら、ちょっとした「家」小説の隆盛という現象が起きているともいえるのかもしれません。

まとめてみますと、まず、知識人の責務として撤去民小説が書かれた70~80年代。その時代は同時に多くの庶民が不動産投機によって成功して階級上昇を実現してきた時代でもあったわけです。そういった時代を経て、民主化と経済成長を遂げ、不動産階級社会は

今や裾野が非常に広がりました。そこにおいて、書く者と書かれる者との距離はより縮まっていると思います。これに関連して非常に面白いのが、ファン・ジョンウンとキム・ヘジンが、人物の名前を用いずに物語を書いていることです。それは単に「男」「女」であったり、キム・ヘジンなどは、「집주인」(大家)と「세입자」(入居者)という人称で押し通したりします。非常に匿名性の高い、顔が見えない、それだけにいつ誰がそうなるもおかしくない、そんな書き方といえましょう。撤去民の肖像もかつては非常に毒々しいまでに個性的だったり、または『こびとが打ち上げた小さなボール』の「こびと」に見るように、幻想的に誇張されたエンジェリックな存在として書かれたりしていましたが、現代の「家」小説ではキャラクターの匿名化が進んでいるのではないかと。

さらに今、地方出身の若者や高齢者を中心に「住の貧困」が深刻な問題になっていますが、ファン・ジョンウンやキム・ヘジンたちは作品を通して、生存権としての住まいというものは何であるかという非常に根源的なところを模索しています。「家問題」が韓国文学のより普遍的なテーマとして定着するかどうか、今後も見たいと思っています。

最後に一つ付け加えたいのは、今日は文学の話でしたので、大変深刻な話が多くなりましたが、そもそも文学というものは不幸にフォーカスするものですし、そういう人たちが小説家になるんですね。実際には、家のことや住まい方について考えることが、生きる力につながったり、人生を元気よく牽引することもあると思います。

たとえばイ・スラさんという面白いエッセイや小説を書く方がいまして、その人のエッセイなどを読んでみると、チョンセ人生をくり返す中で、「自分は住まいに対する希望と恐怖の中で揺れ動きながら成長してきた」といった表現があります。とにかく、そこには成長があるわけです。家に関して非常に建設的に自分の計画を立てながら人生を計画していく。しかも大きなお金を動かしながら住み替

えを重ねてダイナミックに生きていく。このことは、最初にどーんとローンを組んで一生そこにお金を払い続けるという日本人の人生と比べて、随分違いがありますね。彼らの方が人生に張りがあるように思うときもあります。ですので、小説は社会の全てを表したものではないのだということも、一つ付け加えさせていただけたらと思います。

今日はご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

司会(六反田豊氏) : どうもありがとうございました。小説を通じて、撤去民や再開発といった韓国の住まいの問題について非常に興味深いお話をしていただきましたので、是非皆さんに質疑を活発にさせていただきたいと思えます。それでは、これから質疑に移りたいと思えます。よろしくお願ひします。

質問者 1 : 非常に興味深いお話だったのですが、今のように超高層マンションが主流になる前に、何回か中層になって、また何回か建築の許可が進化してもうちよつと高層になって、というように何段階か年代を追って、きっかけのような時期があつて、今のように庶民の人も超高層マンションに住むという韓国の居住スタイルというものが出来上がったというふうに考へているのですが、その具体的なきっかけがあつたら教へていただけたらと思ひます。

斎藤真理子氏 : 私は建築のことは文学に現れたことしか分からないので、逆に伺いたいと思ひぐらいなんです。当然、昔ながらの韓国的な住居からいきなりそこにいくわけではなくて、途中で3階建てとか4階建てとか、それを自分が住むだけじゃなくて、チョンセで住む人を入れながら暮らすという段階を経てきたんじゃないかと思ひますが、それによろしいんでしょうか？多分そうだと思います。したがつて、中層の、3階建て4階建てぐらいの住居が密集した地域がいっぱひありますよね。それと高層アパート街の割合が、今ど

ちが多いのか、私も知りたひです。再開発も一色ではなく色々な特徴がありますから。全然お答へになつていなくて申し訳ないのですが、ついでに申し上げると、作家たちを見ていると、「この人はよく中層の、4階建てぐらいまでの家を書いているな」という人と、「高層アパートを書くことが多いな」という人と、違いがあるんですよ。やっぱり、それぞれの住んできた家の感覚とかが影響するのだと思ひられます。

質問者 1 (続き) : 逆に、どの場所ですういふ事件が起つたかというノンフィクション的な書き方をしている小説はありますか。

斎藤真理子氏 : チャン・ガンミョンという作家の『鳥は飛ぶのが楽しいか』(吉良佳奈江訳、書肆侃侃房) という小説に再開発現場が出てきて、確か「麻浦(マポ) とどこかを混ぜた」とおっしゃつていたような気がします。そういつたノンフィクション的な小説も散発的に見られます。やはり、自分が知つている再開発の現場を書くのが一番リアリティがあるので。それから、ファン・ジョンウンさんの『野蛮なアリスさん』の舞台は金浦に近いところで、作家自身がその顛末の最初から最後までご覧になつていたそうです。再開発組合が出来て、どのように区長に請願に行つて、その時にデモ隊を作つて区長に請願に行くんですが、子どもたちをデモ隊の先頭に置いた方が効果的だから、学校を休ませて子どもたちを連れて行くとか、そういつた細部をです。この小説の中では、再開発を待ち望む町の人たちがかんりグロテスクな行動をとりますが、そういうのはやはり見ていないと書けないのでしょうね。何人かの作家は、取材というよりも自分の体験を基に書いていると思ひます。このあたりもつと綿密に分析すると面白いと思ひます。実際のところは、私は韓国に住んでいないのでわかりづらく、「再建築」と「再開発」の違いなど、本を読んでも今ひとつよくわかりません。法律ではこうなつていふが実際の運用はこうなつていふ、といつたこと

がたくさんあると思うのです。それらについて小説でさらっと書いてあっても奥が読めなくて分からないことが多々あります。すごく複雑な世界だなと思っております。

質問者 2: 本日は 70 年代以降の現代韓国文学における「撤去民」というテーマでお話しいただきましたが、戦前や植民地時代にも都市開発による人の移動、強制移住の描かれる作品はありますか。ご存知でしたらぜひお伺いしたいです。

斎藤真理子氏: パツと思いつくものはありません。私もそういうものがあったら読みたいと思っております。

質問者 3: 韓国の不動産価格が下落している兆しもあるようですが、今後不動産の文学的意味付けはどのように変化するとお考えですか？また、韓国では社会問題を文学で表現することが多いように感じますが、いま沢山取り上げられている社会的イシューはありますか？

斎藤真理子氏: 皆が注目しているのは不動産価格ですね。価格が落ちると皆が怒る。不動産を中心に社会が回っているから、常にそのことを与党も野党も気にかけている。それが韓国の現実だと思います。不動産の問題というのは、今を生きるリアリティが前面に出るイシューではないでしょうか。ですから、必ずしも中心テーマとまではいかなくても韓国文学を理解する上ではそれを知っていた方が絶対生々しく分かるという現実が続くのではないかと思います。それから、韓国では社会問題を文学で表現することが多いというのは、そうだと思います。必ずしも全員ではないでしょうが、龍山事件みたいなことが起こると、かなり早く作品が生まれますよね。セウォル号事件の時もそうだったと思います。あまり簡単に比較してはいけないと思いますが、日本の震災文学というのを見ていると、もう少し長いスパンで温めて、じっくり書か

れたのではないかと。即応性という点では韓国の方がかなり速いと思います。

また、今たくさん取り上げられている社会的イシューは雇用とか労働環境の問題もそうですし、そして若者の貧困と格差ですかね。それは随所に出ていると思います。その中で、色々細分化していると思います。

質問者 4: パラサイトという映画で韓国の住宅事情が世界的に有名になったと思います。小説であのような貧富の差と建物を描いた作品で齋藤さんの 1 番好きな作品があれば教えてください。

斎藤真理子氏: 『パラサイト』は非常に有名になったりしましたが、あれが韓国の代表的な貧困の姿ではない、ということも色んな人が言っていて、私の友人の伊藤順子さんが『韓国カルチャー——隣人の素顔と現在』(集英社新書) に書いているので、是非読んでいただければと思います。『パラサイト』は、貧富の格差をもつごく分かりやすく図式化しているので、あれが代表と言われるとちょっと違うんじゃないでしょうか。ただ、半地下の問題については、近年大雨の時に水が入ってきて出ていかず、住民が亡くなるという大変悲しいことがあったんです。そういう現実があるということですね。

また、家問題が出てくる一番好きな小説は、ファン・ジョンウンの『ディディの傘』という本の中に「d」というタイトルの小説があるのですが、そこに出てくる。小さな半地下の部屋にずっと籠っていた恋人を亡くした人が、徐々に外に出て行くという話です。この『d』という小説については話し出すとキリがないので、何かの時にまた書ければと思っています。

質問者 5: 先ほどお話の中で、こびとが投げたボールの時代に比べて「書き手と対象の距離が近くなっている」とおっしゃっていたところを興味深く聞きました。1970 年代には知識人が撤去民について書く、という図式であ

ったものが、現代は住居の貧困に直面している当事者も、発信している側になっているのではと思いました。書き手の変化について、感じておられることをお聞きしたいです。

斎藤真理子氏：私もそのように思います。ただ、そうは言ってもやはり韓国では、小説家または文筆家が社会のために何かちゃんとしたことを言わないといけないという規範が、全く0にはなりようのない社会だとも思っています。人前で話したり、文章を書く位置についた人は、機会があれば社会をよくするために務めなくてはならない、というか。たとえば、韓国の文芸評論の世界では、「倫理」や「倫理観」といった言葉がかなり頻出するんです。これは日本の文芸評論にはなかなかないところで、格差問題であるとか人権の問題について、これ以上の酷いことは許してはいけないという線が作家が意識し、それについて発言するのは正しいことであるし、それを捨ててはいけないという考え方は、残っていると思います。なので、書き手の側により当事者性が出てきたことは言えると思うのですが、そうは言いつつも、作家の使命感みたいなものは、作家たち本人はそんなことないよと言うでしょうけれども、日本にいる私から見ると、皆さん強く持っていると思います。そして、実際に発言を聞いたり読んだりして責任感を感じることも多いです。

先ほど触れた「引き出しの中の家」を書かれたチョン・イヒョンさんは、三豊百貨店（サンブンペッカジョン）という、IMF 危機の手前の 1995 年に大きな百貨店が手抜き工事が原因で崩壊し、大勢の人が亡くなった事件について小説を書かれています。それについてチョン・イヒョンさんが、「社会と個人の問題がここに凝縮しているので、自分はこの書きなければならぬ、と思って書きました」と、非常に淡々と書いていらっしゃいました。そういう答えがすっと出るというのが、やはり韓国らしいなと思っております。

質問者 6：韓国のこのような住宅事情は、良

い方向に向かわないのでしょうか？急に 500 万を支払うことは、私の感覚では、とても困難だと思うのですが。

斎藤真理子氏：不動産とか住まいを何とかしていくために、皆さん積極的にローンを活用しています。そんなに現金を動かせるわけではないので、正規職についている人は銀行のローンを使いますが、そこには更に弱者の人たちが置かれた隘路が見えてきます。非正規労働はローンを組む上でも非常に不利です。そもそもチョンセというシステムは最初に大きいお金がないと参加できないゲームなわけで、お金を持っていれば持っているほど特になるんですよ。銀行のローンについても、ローンを組めるということはその資格があるということで、プラスの資産だという考えが行き渡っているのではないかと思います。

最近読んだある女性のエッセイ集にも、ローンを組んで借金を抱えるのは嫌だなと思っていたけれども、実際にコーディネーターと話をして書類を書いていくという過程を経て、自立して大人になったという感じを持った、といった内容が書かれていました。そういう方もいっぱいいらっしゃると思います。なので、日本で 500 万円を急に用意しないといけない状況と比較しようにも、社会のベースと感じ方がかなり違うと思います。逆に韓国人から見ると、払ったお金が戻ってこない日本の賃貸方式の方が「信じられない」って言いますよね。

韓国特有といわれるチョンセですが、合理的なシステムといえますよね、それで大家さんが儲けられて、ウィンウィンになるので。ですから、今まで見てきたようにこのゲームに入れず苦勞する人もいるし、チョンセ詐欺もたびたび起きてはいますが、チョンセ自体がなくなるということはないだろうと思います。韓国社会の根幹にかかわるといってもよいシステムなので。

質問者 7：先生の『曇る眼鏡を拭きながら』を読ませていただき、今日のご講話からも視

界を広げていただきました。『韓国文学の中心にあるもの』では「戦争」を主軸に据えて韓国文学史を見通して通史を示してくださいましたし、今日はアパートないしは家という観点から示してくださいました。その際も、高層マンションに住んでいる住民ではなく、撤去民ですとかタルトンネの住民ですとか、龍山惨事で巻き込まれた方、いわば「弱さ」あるいは村上春樹的に言えば「卵の側」から読み解かれたのだらうというふうに拝察しております。日本だと、私の恩師の連れ合いの方にあたるのですけれども、京都文教大学で教授を務められた西川裕子先生が、11月に平凡社ライブラリーから増補版が出た『借家と持ち家の文学史「私」のうつわの物語』で、日本の文学史を「家」と「私」のうつわということで読み解かれたんですけれども、そういう意味でも今日の先生のご講話と日本との対比、あるいは対照、照らし合わせるというふうに受け止めた次第です。また、私の「曇る目」を広げてくださりありがとうございました。

齋藤真理子氏：ありがとうございます。今日のはもっと小説を読んで準備をしたかったのですが、とてもたくさん事例がありますので十分には読めませんでした。「韓国文学と家」というのは大きなテーマだと思います。自分でも従来、そういう印象はあったんですが、ある時に台湾文学の翻訳をやっていた天野健太郎さんに「韓国文学って家の話多いよね」と言われたんです。それで、あ、やっぱり人が見てもそうなのかと思って。その後、英米文学の岸本佐知子さんに「韓国の小説って、チョンセが出てくると話が暗くなるよね」って言われて、これも非常に慧眼だと思ったのですよ。チョンセの話は真剣な話になるので、話が暗くなる場合が多いんですね。このように、他の国の文学をやっている人から見ても韓国文学ってそう見えるんだと思ったのが一つのきっかけでした。ですので、社会学なり韓国文学史をしっかり研究された方が、この観点で韓国文学を分析されたら非常に面白い

んじゃないかなと思います。今教えていただいた西川先生の本もぜひ読んでみたいと思っています。日本と韓国で住宅事情は非常に違いますが、人生に対する態度にも関わってきているのではないかと思いますね。

司会 (六反田豊氏)：まだチャットの方に色々ご質問をお書きになった方もいらっしゃるのですが、既に終了の予定の時刻を過ぎておりますので、大変申し訳ございませんが本日の齋藤先生のご講演はここで終了させていただきます。先生、今日はどうもありがとうございました。

それでは、次回の予告ですが、3回目も一応予定はしておりますけれども、本日はここでご紹介できる段階に至っておりません。年が明けまして、2月ぐらいに第3回のコリア・コロキウムを開催する方向で、現在準備をしておりますので、また講演者や講演題目がはっきりいたしましたら、ご案内をさせていただきます。先生、今日はどうもありがとうございました。

本日はどうもありがとうございました。これにて終了いたします。

<齋藤補足> 当日、質問者の方から「キム・エラン作家の『良い隣人』という短編でも不動産の問題が取り上げられ、主人公の夫が、夫妻で大切にしていた『こびと』の本を捨てる、というシーンが描かれておりました。この夫の姿勢、態度についてどのようにお考えになるか、おうかがいしたいです」という質問とともに、この短編の存在を教えてくださいました。私は未読ですが、『創作と批評』2021年冬号に掲載された作品で、第30回オ・ヨンス文学賞を受賞したそうです。アパートをめぐるさまざまなエピソードを通して人々の気持ちと傷、欲望を描いた小説で、不動産取得をめぐる新旧世代間の葛藤に『こびとが打ち上げた小さなボール』がからんでくるとのこと、コロナ禍の中で発表されたという点も併せてたいへん興味深く、ぜひ読んでみたいと思っています。